福岡県の主な農産物の生産状況

令和４年 10 月 17 日現在
（専技情報より抜粋）

◇普通期水稲（夢つくし、元気つくし、ヒノヒカリなど）◇
９月 25 日現在の作況指数は、全国は平年並みの 100、九州、福岡県は平年並みの 99 です。
「元気つくし」は収穫終了しました。「ヒノヒカリ」は、収穫中で、10 月 15 日頃終了の見込みです。10 月 14 日頃から「実りつくし」、「ヒヨクモチ」の順で収穫予定です。
「ヒノヒカリ」、「実りつくし」は、台風 11、14 号に伴う葉の裂傷や倒伏があったものの、収量、１等米比率は平年並みとなる見込みです。
「ヒノヒカリ」以降の品種は、出穂後の積算気温と黄褐色籾比率、籾水分を確認して適期収穫に努めましょう。

◇大豆◇
現在、子実肥大期から黄葉期です。
適期播きにより、主茎長は平年並みであるものの、８月中下旬の多雨日照不足により、莢数は平年よりやや少ないです。
台風 11、14 号に伴う倒伏により、粒肥大の抑制及び収穫ロスが懸念されます。
アサガオ類やヒユ類、ホオズキ類などの雑草が蔓延しているほ場が散見されます。
大型雑草は、汚損粒発生防止や効率的な収穫作業実施のため、早めに除去しましょう。
落葉期以降は暗きょの栓を開け、排水を促しましょう。
収穫ロス、汚損粒の発生軽減のため、コンバインにリフターキットを装着する準備を行いましょう。

◇イチゴ◇
定植は、９月末までにほぼ終了しています。
生育は、早期作型、普通期作型とも昨年よりやや遅い傾向です。早期作型を中心に、２番花房の分化促進対策として、遮光処理やかん水制限等による生育抑制を実施中です。
出蕾・開花は、定植の早いものから順に始まっており、出荷開始は 11 月上旬

から中旬となる見込みです。
生育に応じて、遮光処理やかん水制限等での生育抑制による２番花房の分化促進対策を徹底しましょう。
摘葉後にハダニ類の対策を徹底しましょう。
炭疽病が多発したほ場は、秋ランナーなどを活用し親株を更新しましょう。

◇ブドウ◇
出荷はほぼ終了しています。着果過多や高温による着色遅れで、出荷が遅れていたものの、最終的には結実不良や裂果・腐敗が多発した前年を上回る出荷量となりました。
「シャインマスカット」を中心に高単価傾向で推移したため、販売金額は前年、過去５年平均を上回りました。
収穫後は、べと病、トラカミキリ等の病害虫対策を徹底しましょう。

◇ナシ◇
「幸水」は、果実肥大、品質ともに良好で、関東産の成熟遅延により全国的に数量が少なく、単価は前年比 110％の高値で推移しました。一方「豊水」は、全国の数量が前年比 118％と供給過剰になり、単価は同 90％となりました。
10 月上旬までの全体の数量、単価は、前年、過去５年平均を上回りました。
「豊水」の一部の園地で炭疽病が発生し、多発園では早期落葉が見られます。
炭疽病が多発した園では、翌年の６～８月の対策を徹底しましょう。
枝の充実を図るため、秋季せん定や病害虫対策を徹底しましょう。

◇施設ギク◇
夏秋期の輪ギク（６～９月）の出荷量は、高温による立枯れの増加とスプレーギクへの品目転換により、前年比１割強の減少です。一方、単価は、全国的な生産量の減少により、前年、過去５年間平均を約１割上回りました。
秋ギクの 11～12 月出荷作型は順調に生育しています。10 月中旬より加温を開始し、花芽分化から開花させるステージへ移行します。
秋ギクの花芽分化を促すため、消灯前１週間の予備加温および花芽分化期の温度は、17℃以上を確保しましょう。
採穂用の親株は、低温に遭遇すると本ぽでの開花遅延を助長するため、12℃以上を確保しましょう。
白さび病の予防やアザミウマ類、ハダニ類の対策を徹底しましょう。

◇肉用牛・豚・鶏◇
和牛去勢の枝肉価格は、物価上昇により需要が他の畜種へ向かっていることから、前年度を下回りました。省令価格は、輸入牛肉の価格高騰により、乳牛去勢などの需要が堅調で、前年と同水準の価格を維持しています。
豚枝肉価格は、輸入豚肉の価格高騰が継続して代替需要が堅調だったことから、前年比、過去５年平均比ともに上回る価格を維持しています。
鶏卵価格は、好調な業務用需要に加え、気温低下で家庭向けの販売も堅調であることから、前年比 114％、過去５年平均比 126％と大きく上回りました。
家畜伝染病発生予防のため、農場の衛生管理を徹底するとともに、早期の疾病対策のために家畜の健康状態の確認に努めましょう。
稲 WCS や稲ワラ収穫、牧草の播種作業等と労働時間が増える時期となるため、農作業事故に注意しましょう。